

飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

第 483 回 うちわ祭の経済効果

2012.7.29

八坂神社大祭「熊谷うちわ祭」の主催本部(年番)の役員(副大総代)なる大役を、初めて体験させていただいた。もう、完全に「熊谷っ子」である。

熊谷の夏の暑さはもとより、祭りの熱さは想像を絶するもので、寛延 3 年以来 260 年超におよび先人たちの培った伝統と文化を後世に伝えるべく現在に至っている。

12 台の山車・屋台が各町内を絢爛豪華に巡行する華麗な「曳き合わせ」、かつ、熱闘極まる勇壮な山車・屋台の「叩き合い」を繰り広げます。胸高鳴るお囃子の音、伝統と熱気が漂う「うちわ祭」は、例年 70 万人を超える多くのお客様が来熊され、一年を通して最高に盛り上がり、街中が熱気と興奮に包まれる。

「遵故日新」(じゆんこにつしん)、謂れやしきたりや伝統を守ると同時に、日々新たなる志を持つ…こんな意味なのだろう、宮司から今年のテーマを頂いた。

神事としての意味合いが強い八坂神社大祭、祭事としてのしきたりや歴史と伝統は、脈々と受け継がれ「つなぐ」大役の身としては、まさに遵故に徹し、時代の新古を超越して不変なるもの、つまり、不易を貫こうと考えている。

そして日新、これも今年の大きなテーマであった。70 万人という県内最大の集客力を誇る大イベントの「熊谷うちわ祭」は大きな観光資源であり、観光化への挑戦は関係者の密かな希望であった。時代と共に変わる価値観や運営方法、祭り自体の在り方は、その時の情勢によって対応すべきかもしれない。この不易流行の思想を観光化へのチャレンジと捉えるのは、一つの道理といえるかもしれない。

永いうちわ祭の歴史の中で、今年初めて熊谷市の無形民俗文化財に指定され、新たなスタートを歩み出すこの年に、今までと少し新しい「熊谷うちわ祭」を開催、体験することは、多くの関係者、参加者、そしてわざわざ熊谷に来ていただくお客様にとって、新鮮な感動を与えることと考えている。

さて、実際にお祭りは終わった。

異例ともいえる熊谷にしては涼しすぎるお祭りだった。観光客は恐らく70万人では収まらない、公式見解では75万人とのこと、いや、もっといただろう。お祭り年番の実行予算は、本会計と寄付のスポンサー会計、合計で約 3,000 万円である。実際はそれ以外に各町内、祇園会(お囃子会等)の会計があり、とてもそんな額ではできっこない。

ここから飯島流の勝手な試算、お祭りシミュレーションである。

仮に観光客が 75 万人、執行予算が 5,000 万円だとすれば、観光客一人当りのお祭り経費は約 67 円ということになる。信じられない低額でこれほど多くの観光客を集めたとすれば、観光効果は計り知れないものがある。

彼らが熊谷市に落とす観光消費額は、交通費、飲食費等 2,500 円だとすれば、直接消費額は 20 億円、観光経済波及指数 1.67 倍だとすれば、約 35 億円の経済波及効果があったといえる。これは熊谷市民一人当たり約 17,500 円の所得効果である。

地域経済的視点から見ても、恐るべき「うちわ祭」。やはり熊谷の文化、観光的「宝」として、脈々と継承、発展させなければならないのは、明らかなようである。